



Title	リプライ 中村政則氏の書評に答えて
Author(s)	櫻井, 義秀
Citation	現代社会学研究, 19, 85-88 書評 リプライ
Issue Date	2006-06-10
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/17121
Type	article (author version)
File Information	shohyo.pdf



[Instructions for use](#)

1 本書の構成に関わる批判に対して

初めに、本書を書評対象本とされた『現代社会学研究』編集委員会の諸先生方と、正に読みやすくはない本書に適切な批判をくださった評者の中村政則氏に御礼申し上げたい。

批判の中心は、論文集という性格が強い本書の構成に関わる点と、文化、とりわけ宗教の概念的理解と評価に関わるものであったと思われる。書評を読み、評者の著作『台頭する私営企業主と変動する中国社会』（ミネルバ書房、2005年）と、『脱オリエンタリズムと日本における内発的発展』（東京経済情報出版、2005年）を読み合わせ、さらに評者の推薦書である加地伸行氏の書籍（推薦書は『沈黙の宗教—儒教』筑摩書房、1994。他、『儒教とは何か』中央公論、1990年。『家族の思想』PHP新書、1998年。『教養は死んだか』PHP新書、2001年。）を読んで、ようやく評者の言わんとしているところのみこめた。

評者は東アジア（中国）、筆者は東南アジア（タイ）の地域研究と、傍目には隣接地域・学問領域に見えるかもしれないが、「地域」と「文化」を捉える視点は相当に異なる。この点を確認しておかないと、研究のまとめ方や調査資料から読み込まれた知見の評価に関して、なぜ異見が出てくるのか分からない。書評とリプライの面白さは、論者が前提としている視座や概念の相違を含めて論点を明確化できるところにある。

さて、評者はまず本書のまとまりの弱さを挙げる。一貫した問題意識や包括的理論によって複数の研究対象が分析・解釈されていない。また、東北タイの地域社会を叙述することに徹すれば、日本人による日本語教育 NPO（筆者が理事）は削るべきだった。さらに、部分社会を分析することで全体社会の像が見えてくるという論法は安易ではないかと。

確かに、そう指摘されても仕方ない面があろう。本書は 10 年余りの期間で、農村家族、地域文化・宗教、出稼ぎ労働者、地域開発 NGO/NPO を順に調査しながら、東北タイの地域社会を描き出そうとしたものである。元原稿は大半が学会誌投稿論文であったため、各章とも調査データを拡充しているものの、領域社会学と地域研究をミックスしたオリジナルの問題設定をかなりそのままの形で残している。論文相互の関係に関して言えば、領域社会学の議論としては独立しているが、東北タイ地域研究という面で相互補完している。評者もこの点は認めた上で、なお、包括的な理論や視点を望まれたものと思われる。

評者の期待と、それに応えていないという不満を受けとめた上で、やはり、包括的な視点や理論を提示することが難しいことを認めざるを得ない。グランディド・セオリーの発想と分析にこだわっているといえ、自己弁護しすぎであろうか。

例えば、本書では農村出身の工員が、労働・生活世界に違和感を抱きながら、労働市場における自分の位置を見極めて転職したり、我慢したりする様子が描かれた。筆者は鎌田慧のように「アジア絶望工場」と悲観せず、「労働の人間化」へ向かう労働者自身の主体形成が見られるといった楽観的観測もしなかった。また、地域開発 NGO/NPO の可能性に関しても、オルタナティブな開発によるエンパワーメントをある程度評価しても、自治的

領域や開発効果を確固たるものにするためには、なお課題が多いことを書いている。

おそらく、市民社会論を構想するには、社会の各層からキーパーソンになりうる主体を考察する必要がある。外資や華人資本家層、行政官僚、政治家による政治経済支配の構造に対抗するべく、タイの内発的発展論で主体と指定されているような地方のキーパーソン（篤農・名望家、教師、僧侶等）と NGO 等の運動体が、都市住民とどのように協働しているのか。構図は語れても、事例を探すことが難しかった。そこで、筆者は 2 つ試みた。

一つは、タイ社会論を自身のものではなく、タイ社会やタイ研究において論じられている社会像から描き出そうとした。これも下手な議論をするよりは、知識社会学的な情報の提示を心がけたものである。もう一つは、私的な問題意識と実践を日本語教育 NPO のやや冗長な章で語ってみた。5 年も海外支援 NPO をやってみれば、組織・人の表も裏も分かる。

したたかなタイの人々と自分探しの日本人のコントラストを感じ取ってもらえたらうか。オルターナティブ探しや善意の表明を「新しい社会運動論」や「開発・援助学」と称して調査研究をするのは私の趣味ではない。だから、自分の金と時間でやってみた。そして、被調査者ではない東北タイの人々に出会い、金と人の交渉をし、人間くさいつきあいをしたのである。お情け頂戴の調査者から利用される NPO の人になり、分かったことも多い。

2 東南アジアのタイ社会と東アジアの中国社会

本書は東北タイという限定的な地域研究である。タイ社会を論じるためには、本来、東北と北・中部・南の 3 地域との地域差が検討されねばならない。また、ミャンマー、ラオス、カンボジアとの「境域」をエスニシティ、宗教という文化的交流のみならず、交易や労働力移動からも考察する必要がある。東北タイの実践仏教もまた、東南アジアにおける上座仏教圏という大枠の中で捉えかえされるべきだろう。日暮れて道遠しである。

ところで、筆者は従来東南アジアという単位でこの地域を考えてこなかった。一つの地域と見なすには、あまりにも多様である。どうしても、言語・民族・宗教・社会構成の差異性に目がいてしまう。タイ研究の現状もその通りで、地域ごと、学問領域ごと、問題ごとに専門性が成立している。筆者はこの中である程度の仕事をしたいと考えているが、評者の言うように比較社会学や社会学一般に展開できる議論をすべきなのであろう。この激励は有り難く受けた。しかし、同時に、タイ地域社会→東南アジア社会→アジア社会と議論を拡大しにくい地域性が、逆にこの地域の特徴となっていることにも留意願いたい。

タイは、12 世紀頃に揚子江以南からインドシナ半島に移動してきた人々の末裔からなり、上座仏教と精霊崇拜が混濁した宗教文化を有し、複数の民族と華僑から構成された多民族国家である。文化の起源はインドと中国の二大文明に遡らざるをえないだろう。タイは派生的社会であり、ここに東南アジア地域の範型となるような文化や社会は認められない。

それに対して、中国は、巨大な人口と長大な文明を有する漢族がいる中華帝国であり、東南アジアの港市国家を朝貢国として従え、近現代において華人資本ネットワークはこの地域の経済を支配してきた。アジア地域の範型的社会である。評者の「地域」概念には範

型的モデル（類型化できる祖型がある）が強いと思われるし、それは中国で妥当している。

評者が「脱オリエンタリズム」の社会把握を目指す際、社会構成の担い手としての民衆を掲げ、民衆の両義的・重層的な生活世界としての文化や宗教の役割を高く評価する。その論理構築の背景には、中国社会における範型的要因が効いているように思われる。中村氏の著作と中村氏が高く評価する加地伸行氏の著作を併せて読みながら、中国研究者ならではの論理展開を感じた。中村氏の日本社会を見る視点と加地氏のそれとは相当に違うが。

評者がしばしば「これ以上踏み込まない」と表現されたところこそ、論点として踏み込むべきところである。とりわけ、宗教の概念に関わる問題を以下で論じたい。

3 宗教と社会

加地氏の儒教概説書2冊と社会評論書2冊を読むと、社会的価値が萎えてしまった現代に「共生の幸福論」として儒教を復活させたいという気迫と、儒教は東北アジア人の死生観・家族的道德観に貫徹しているという強い信念が伝わってくる。日本では朱子学の影響もあり、儒教を礼から倫理・道德として受け取ってきたが、孝の宗教的側面こそ儒教の本質であるという。祖先崇拜により先祖と子孫の歴史的一体性を感得、戒めとし、「別愛」の道理によって家族・親族・縁者の社会圏を構築していくのが、日本人も含めた東北アジア人なのである。筆者には、加地説が山下龍二「儒教の宗教的性格」（『朱子学と反朱子学』研文社、1992）に連なること以上に学説の理解はできない。しかし、儒教成立・発展期以外の時代や中国以外の諸地域の文化・社会について、氏の範型としての儒教理解から論評を加えていく方法論を首肯しかねる。人文社会科学はおしなべて、地域的・歴史的差異性にこだわる。宗教運動の発生を全て価値剥奪に還元するのは確かに「愚かな解釈」であるが、「葬式仏教」も「新宗教」も根底は儒教という還元の仕方も極端にすぎると思われる。

中村氏は、中国では儒教に対する道教・仏教の民衆宗教的要素、男性原理と女性原理の相補性を提示しており、加地氏よりも説得力があると思われる。しかしながら、包括的な原理で広範囲の社会を理解しようという志向性はやはり中国研究ならではのものを感じてしまう。宗教・文化と社会の連関の仕方・度合いは、宗教のあり方による。それが儒教圏（祖先崇拜とは親族構造の儀礼化そのもの）と、上座仏教圏（出家者の宗教）では異なる。

筆者は中村氏とは宗教や精神の連続性に対する感覚が違うのかもしれない。その理由は、文化的土壌としての広義の宗教を扱うのか、対象・行為が明確な「実践宗教」を研究するかの相違もあるが、思想や文化の範型が想定しうる「地域」研究と、範型から派生した諸類型が混淆し、蓄積されてきた「地域」を研究してきたことの差にもあると思われる。

本論では、東南アジアと東アジアにおける「地域」研究の差異を論じながら、著者と評者の学問的前提に関わる小論を展開してみた。これも中村氏の重厚な研究に触発されてのことである。北海道社会学会の学会誌を借りて、中村氏と議論できたことを喜びたい。中堅の研究者にとって、書評とリプライの活用は、今後の研究を進展させるために大いに力となる。日常は校務と教育で手一杯であるが、中村氏のエールに応える次作に備えたい。